

「とはいえ」の成立と展開

北崎 勇帆

1 はじめに

「とはいえ」¹は、格助詞「と」、係助詞「は」、動詞「言う」によって構成される、後件が前件から予想される推論に反することを示す連語である。(1)のように文中で用言もしくは体言を受けて接続助詞相当の働きを持つ場合と、(2)のように文頭で接続詞相当の働きを持つ場合がある。

- (1) a. 田中邦衛さんだって終了した**とはいえ**、きっといつまでも『北の国から』の五郎だろうからね。 (LBr7_00049²)
b. 観光地**とはいえ**京都駅から少し離れたこのへんになると、十二時過ぎに開いているのはコンビニくらいしかない。 (PB29_00026)
- (2) a. 田中とは班がちがうこともあり、あまり親しくはなかった。**とはいえ**同じ部署で、部屋でいっしょに仕事をしていた仲間の死に直面したのだ。もう少し悲しむなり驚くなりしてもいいだろう。 (PB39_00612)
b. ただ、奈良時代にすでに日本書紀の講読・加注の行われたことは、もはや疑うことができない。**とはいえ**、今日残存する資料では、書紀の全文が奈良時代に一定の訓読を持ったか否かは不明である。 (PB32_00090)

「とはいえ」の近代以前の例については、湯澤(1954)に『妙竹林話七偏人』から(3b)の例が、小学館『日本国語大辞典』(第二版)に(3a)『幼稚子敵討』の例が挙げられる他、青木(1973: 247)に近松浄瑠璃・近世歌舞伎脚本に見られることが示され、田中章夫(1984: 114)には「トイハエ」「トハイイナガラ」「トハイウモノノ」などは、江戸時代に成立したものと見られる」との言及がある。

- (3) a. 口明「**とはいへ**百両といふ才覚はならず」 (幼稚子敵討 [1753 初演])
b. 「どうすりやアそんねへにくらいてへのだ」「**とはいへ**餅なら自己も喰ひてへ」 (妙竹林話七偏人二上 [1857 刊] 湯澤 1954: 346)

¹ 「言え」「いへ」「云へ」等の表記があるが、「とはいえ」に代表させる。後の「ともいえ」等も同様。

² 現代語の用例には国立国語研究所編『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)のサンプルIDを付す。

本稿も「とはいえ」の成立を近世前期と見る。その成立の経緯は明らかではないが、辞書の記述としては、三省堂『大辞林』(第三版)の「とはいえ」の項に次の記述がある。

格助詞「と」・係助詞「は」に動詞「いふ」の已然形「いへ」の付いたもの。「とはいへど」の「ど」の略された形

しかし、「とはいえ」を「とはいえども」³の「ども」の脱落と考える場合、中世・近世により一般的であった、係助詞「は」を伴わない「といえども」という形式からは「といえ」が発生し得なかった⁴一方で、「とはいえども」に限って脱落が起こったという点に疑問が残る。また、後述するように「とはいえども」は接続詞的用法を持たない一方で、「とはいえ」は接続詞的用法が接続助詞的用法に先行しており、連続性が見られない。以上の理由により、本稿では「とはいえ」を「とはいえども」の「ども」の脱落とは見ない。ここでは、動詞命令形による逆接条件形式の生産という観点から「とはいえ」を扱いたい。結論を先取りすると、「とはいえ」を「とはいえども」由来ではなく、「であれ」「にせよ」「ともあれ」等⁵と同種の動詞命令形由来の表現として捉えることにより、先に挙げた、用法の先後関係等の問題点を解決することができる。

以上の観点に基づき、次節以降にて「とはいえ」と、関連する「ともいえ」「とはいえども」「さはいえ」といった形式の各時代の例を概観する。調査は口頭語を反映すると考えられる資料を中心としたが、「とはいえ」自体が近世後期以降、口語的な語であるとは言えなくなっているようであるから、戯作の地の文や読本等の文語体の箇所・資料も補助的に用いた。

2 「とはいえ」について

「とはいえ」の初例は近世前期、近松の世話浄瑠璃に見られる。

- (4) a. 相手が死んだら斬らるゝ覚悟。とはいへ彦介め、さほどの疵ではなけれども。ねだつて銀にするもがりとは鏡にかけたこと。(山崎与次兵衛寿の門松[1718 演])
b. よい / \、こちの人が京からの帰りを待つて、詰め開かせ。たいいで暇は取らぬ。とはいへ、世上の女夫仲。去るといふこと誰がこしらへ、憂い目をさせる。かはいやと。嘆けば、わつと泣き出す声。(心中宵庚申 [1722 演])

³ 「ど」「ども」の差異は文体差による(築島 1963)ものであり、本稿ではその差を直接の考察の対照としないため、以降、「ども」に一括する。なお、上代・平安時代初期では接続助詞を伴わずに已然形単独で条件表現を行うことがある(石田 1939・大野 1993 等)が、「とはいえ」の出現時期とは連続しないことから、考慮に入れない。

⁴ 後述するように、「といえ」が見られるのは近代以降である。

⁵ 「であれ」「にせよ(しろ)」の史の変遷については北崎(2016b)にて、命令形由来の表現の総体については北崎(2016a)で論じた。

「とはいえ」の「と」は前接語を受ける格助詞であろうから、接続詞的用法は接続助詞的な用法よりも後発的なものであると考えるのが妥当であるように思われる⁶が、実際には即さない。文中か文頭か、接続助詞か接続詞かといった判断は難しいが、(4)の「とはいえ」はともに句点の後に現れることから、少なくとも接続助詞の確例とは言い難い⁷。次の(5)もやはり文頭と見られる位置に「とはいえ」が現れるものである。

- (5) a. 我が傾城狂ひももと佐賀右エ門めがすゝめ。^{地中ウ}とはいへ今さら侍の武具馬具を代なして。 (夏祭浪花鑑 [1745 演])
- b. 先へはよもや廻るまい。^{地ウ}とはいへ道が氣遣ひな。 (夏祭浪花鑑 [1745 演])
- c. ヤレ声が高い。奥へ郷左衛門や放駒も来てある。お前と敵同士の権九郎。皆佐渡七最風の悪者。とはいへ氣遣ひさんすな。清水での思もある。わしが匿うてあげませう。 (双蝶蝶曲輪日記 [1749 演])

この接続詞的用法は近世後期にも広く見られる。以下の3例は、対話者の発言や場の状況を受けて発話の冒頭で用いられている。

- (6) a. 初音「そんなら是より帰りましゃふ。」水茎・玉井「私どもゝ御一所に。」初音「**とはいへ**正しう。」ト思入。 (名歌徳三舛玉垣 [1813 演])
- b. 宗助「へい / \、御詞に随ひまして、此まゝお別れ申まする。」ト三人宜しく一札をなし立上る。お雪、紋三へ思入有て、お雪「**とはいへ**、あなたへま一度お礼を。」 (小袖曾我薊色縫 [1858 演])
- c. 三「夫れぢや私が背負つて上げやせう 金「猶嫌です 兩人「是れは情なの御託宣 福「**とは云へ**、彦ちやんならば 小金「どうだか知りませんヨトにつこりわらふ (春色恋廻染分解四編 [1860 頃刊])

一方、近世後期に見られる次の例は、名詞を受ける接続助詞的用法と見てよいだろう。但し、いずれも口頭語を反映する資料・箇所ではない。

- (7) a. これ忠義の為**とはいへ**、年来が、夥の敵を射殺したる、その報也とするときは、絶て恨るに足らず。 (椿説弓張月後編 [1808 刊])
- b. されば甚五郎も出入店の出見世 [=支店 (の者)] **とはいへ**、実は血筋の鳥雅 [=

⁶ もともと接続助詞的用法を持つ語が接続詞的用法を獲得した例は多い。田中章夫(1984)、山口(1996)、小林(2005)、小柳(2016)等。

⁷ これは同じく近松世話浄瑠璃に見られる「といえども」に「汝傍輩の源十郎を。人違へにてあやめし段は、白状紛れなしといへども。盗人の咎いまだ分明ならぬ故。」(五十年忌歌念仏)と句点がないことと対照的である。浄瑠璃台本の句点は必ずしも意味の句切れを意味しない(上野2016)ため、句点をそのまま文の区切りとして扱うことはできないが、「曲節の変わり目、息つぎ、その他の切れ目に使われる」(祐田善雄校注 日本古典文学大系『文学浄瑠璃集』 凡例)ことを重視したい。

接続助詞的用法は近代に入ると豊富に見られるようになる。(8)に近代雑誌の例,(9)に小説の例を挙げる。

- (8) a.所謂専制の政治命令の主義たる一大図画は一家の上にも一族の間にも之を縮写することとなり大小其幅を異にする**とは云へ**模形は同一の模形たるを免かれざるに至りしなり。(国民之友第三号 [1887] 植木枝盛「国家組織の基礎」)
- b.世人の未だ此理に通ぜざるは、無理ならぬこと**とはいへ**、教育家其人にして、男は男、女は女と、大に差別を其間に劃して、…其愚や又笑ふべし。
(女学雑誌第二八号 [1894] 桜井鳴村「女子教育家に告ぐ」)
- c.比較的少数**とは云へ**、邦語を以て著はしたる教科書註釈書、外国の名著乃至法文の翻訳年々其数を増加し来り、(太陽一九〇一年一〇号 岡田三面子「法律時評」)
- (9) a.馬鹿々々しいと思うにつけて、たとい親しい間柄**とは云え**、用もないのに早朝から人の家へ飛び込んだのが手持無沙汰に感ぜらるる。(夏目漱石『琴のそら音』)
- b.ドイツは…外交の上でも、いかに勢力を失墜している**とは云え**、まだ深い根柢を持っているロオマ法王を計算の外に置くことは出来ない。
(森鷗外『かのように』)
- c.その金が大抵正井の懐ろに吸収されてしまうのだと思うと、いくら間接には倉地の為め**とは云え**葉子の胸は痛かった。(有島武郎『或る女』)

なお、「は」を伴わない「といえ」が現れるのはこの時期である。「といえ」は近世以前には見られず、「とはいえ」より発生が遅れる。調査の範囲では接続助詞的に用いられるもののみが見られ、接続詞的な「といえ」の用例はなかった。

- (10) a.して見ればおれの知恵の光も、五欲の為に曇った**と云え**、消えはしなかったと云わねばなるまい。(芥川龍之介『俊寛』)
- b.節子と同じ屋根の下に暮して見た四月余りは短かかった**と言え**、可成岸本の心持を変えた。(島崎藤村『新生』)

「言う」の代わりに「申す」を用いる「と申せ」も見られる。配慮上の要請を背景としつつ、「とはいえ」からの類推によって成立したと思われるが、本稿は「とはいえ」の成立の考察を主眼に置くので、これらの形式についてはここで触れるに留める⁹。

- (11) 前司はかたちも美しい上、心ばえも善いそうでございますし、前司の父も受領と

⁸ 『春告鳥』の底本(早稲田大学古典籍総合データベースにて確認)は句読点を持たないため、(5b)は接続助詞的用法の確例ではない。

⁹ 「といえ」「と申せ」ともに、現代語にも例がある。高橋(2016)も参照。

は申せ、近い上達部の子でもございますから、お会いになつては如何でございますか？
(芥川龍之介『地獄変』)

3 「ともいえ」について

「とはいえ」に形式が類似する表現として「ともいえ」が中世前期以降に見られる。それぞれ「思ハバ思へ」「…とも思へ」とあることから分かる通り、「さもあらばあれ」に類する、いわゆる「放任」の用法による表現である。

(12) a.人ハイカニモ思ハバ思へ、狂人トモ云へ、我心ニ、仏道ニ順ジタラバ作、仏法ニアラズハ行ゼズシテ、一期ヲモスゴサバ、世間ノ人ハイカニ思フトモ、不可苦。
(正法眼蔵隨聞記卷三)

b.この心を得ざらん人は、物狂とも、うつゝなし、情なしとも思へ。
(徒然草一一二段)

これらの例はいずれも、「言葉を口に出す」という「言う」の本義、また、命令形によって表される行為指示の意味を残している。ここにさらに変化が進み、逆接仮定条件を表す接続助詞的用法を獲得した例がある¹⁰。

(13) a.入道「…祇王があらん所へは、神ともいへ、ほとけともいへ、かなふまじきぞ。
とふ / \ 罷出よ」
(覺一本平家物語卷一¹¹)

b.縦ヒ、神トモイへ、仏トモイへ、義王カアラン処ニハ、叶フマシキノ、疾々、
罷出ヨ
(斯道文庫本平家物語卷一)

c.げにも道理なり、誠に我主の御所へ、物具して、怪気なる者が夜陰に打入たらんをば、縦ひ宣旨共いへ、院宣ともいへ、後は知ず、弓矢取の習なれば、一旦は防戦んずるぞかし、
(源平盛衰記卷一三)

d.此勢ヲ見テハ、如何ナル鬼神トモイへ、今夜落ヌ事ハヨモ非ジト覺ケルニ、
(太平記卷一六)

e.武蔵坊これを見て、「鬼神とも言へ、当時われを相手にすべき者こそ覚えぬ」とて以つて開いてちやうど打つ。
(義経記卷三)

¹⁰ 類例に「いかにもいえ」がある。いずれも「どのように言っても」の意であり、「言う」の意味は希薄化されていない。

・但シ義ヲハイカニモ云へ。其宗ニ約スレハ。云ヒツムルトコロノアル也。(解脱門義聴集記卷一〇)
・我命ノ惜ニハ非ズ。法命ヲコソ惜メ。人ハイカニモイへ、痛処ナシ。(沙石集卷二・五)

なお、後者の『沙石集』の「人ハイカニモイへ、痛処ナシ」の箇所は梵字本には見られるが、米沢本には見られない。

¹¹ 屋代本(平家抜書)にも「神トモイへ、仏トモイへ、叶マシキノ。」とある。

中世において、命令形によって逆接仮定条件を示す場合、典型的には「であれ」の源流である「(に・にて・で)もあれ」の類が用いられていた¹²(湯澤 1929・1954, 中村 1993)。しかし、現代語における「であれ」「にせよ(しろ)」のように固定化された環境とは異なり、中古以降、中世頃までは次例(14)のように、「あり」に限らない動詞命令形によって逆接仮定を表すことができた(北崎 2016b)。

- (14) a. 「…ありとあるかぎり、みこにもおはせよ、上らうにもあれ、おもてやはみえ給へる。…」との給へば、… (うつほ物語 国譲中 北崎 2016b : 3)
b. いくさは又おやもうたれよ、子もうたれよ、死ぬればのりこへ / たゝかふ候。
(覚一本平家物語卷五 北崎 2016b : 9)
c. 敵にもおそはれよ、山越の狩をもせよ、深山にまよひたらん時は、老馬に手綱をうちかけて、さきにおたててゆけ。 (覚一本平家物語卷九 北崎 2016b : 9)

(13) の「ともいえ」も同様の原理によって生産されたものと考えられる。即ち、「ともいえ」は已然形の「いえ」を含む「ともいえども」の「ども」が脱落したものではない。以下に「ともいえ」の中世後期の例を挙げる¹³。

- (15) a. イカナル母子トモ云へ、皆焼テ失セウソ。 (史記抄 高祖本紀)
b. イカナ智者トモ云へ、人ニ打殺サレテ後ハ、曲カナイ事ソ。 (史記抄 弟子列伝)
c. 聴従——トハ、ヲウ / \ト云テ、ナントモ云へ、従テツカワルヽモノソ。
(史記抄 李斯列伝)
d. 人臣ノ忠トモ云へ、紀信ホトノ忠臣ハ、アルマイソ。 (史記抄 呂后本紀)

やはりこれも、「あり」の命令形による逆接仮定条件の用法と近似する。(16a)に、中世後期において「あれ」が「如何」と呼応する例、(16b-d)に「何」と呼応する例を挙げておく¹⁴。

- (16) a. 遷カ心ハ反臣ヲハイカナル同姓ノ諸侯テモアレ、列伝テライテモ末ニ可立キノ。
(史記抄 呉王濞列伝)

¹² 現代語の「にせよ(しろ)」に類するものは未発達であった。北崎(2016b)参照。

¹³ (13a)の『天草版平家物語』における対応箇所は「ともいえ」のまま保持されている。

・そのうえ祇王があらうずる所えわ神ともいえ、仏ともいえ、かなうまい (天草版平家物語卷二)
その他、『虎明本狂言集』には「言う」の意味を残す例がある。
・たとへておや [=父親] をば、しんぶ共ごんぶともいへ、ははおやは、おふくろとも、だんぶくろともいへ、おれはしやていとはいはれまひ (虎明本狂言集 舍弟)

¹⁴ なお、「なにともあれ」自体は中世後期が初出ではなく、中世前期に既に見られる。

・鬼同丸、頼光のの給事を聞き、「口惜物かな。何ともあれ、今夜のうちに此恨をばむくはむずる物を」と思ひたりけり。(古今著聞集巻九)

b. ナニトマレ帰—イトマヲ申シテ可帰ソ (四河入海卷五 湯澤 1929 : 286¹⁵)

b. 鞭ハナントモアレ革テシタモノソ。 (史記抄 三皇本紀)

d. 賢材アル士ヲ納テ、ナニトモアレ、王僚ヲ襲テ、代ラウト思フソ。

(史記抄 呉太伯世家)

近世以降になると、「ともいえ」は口語的な箇所・資料に見られなくなる。文語体の資料であっても、近松時代浄瑠璃や読本に数例が見られるのみである¹⁶。

(17) a. あれ引き出せと下知すれば。何某を女とや。オ、女ともいへ男なりけり胎内に。

夫の魂やどり木の梅と桜の花心。

(姫山姥 [1712 演])

b. 古事記伝兵衛と人はいふとも独学孤陋といへど、其始は師の教へにつきて、後々は独学でなければと思ふより、私ともいへ、何ともいへ、独窓のもとに眼をいためて考へて見れば、どうやら知れぬ事も六七分はしれたぞ。

(胆大小心録 [1808 刊])

4 「とはいえども」について

「とはいえども」は、主に漢文訓読文において用いられる「といえども」に「は」が介在する形式である。「といえども」は格助詞「と」が文相当に下接し、確定条件を表す接続助詞相当の用法から始まるが、次第に仮定条件も表せるようになり¹⁷、中世には活用語を受けず、名詞に直接接続する例が見られるようになる¹⁸という。

ここで「とはいえ」成立前の中世後期以降の「とはいえども」の例を見ると、次のように、用言や助動詞、名詞を受ける例のみが見られ、「とはいえども」の前に句切れがある例は見当たらない。

(18) a. したが他人を母にすれば、御等閑は候ぬとはいへ共、其様にはせぬ程にぞ。

(毛詩抄卷四)

¹⁵ 「とまれ」は「ともあれ」の縮約された形。

¹⁶ 中村 (2006) は、近代の評論文に「ともいえ」が見られることを指摘し、次の 2 例を挙げる。

・この心を得ざらん人は、物狂ともいへ、現なし情なしとも思へ、譏るともくるしまじ、誉むるともきゝいれじと一生の心血を尽して一代に絶叫し、…… (平田秃木『吉田兼好』中村 2006 : 187)

・此に於てか、或者は知識に媚びて、人間に墮ちんよりも、理は如何ともいへ、去つて単一なる宗教的感情に身を捧げんと願ふ。 (島村抱月『囚われたる文芸』中村 2006 : 187)

その上で、これらは「中世に行われた「…ともいへ…ともいへ」に倣ったものであろう」とし、例として『平家物語』の「神ともいへ」の例を挙げる。2 例目はそのように見てよいが、1 例目は、厳密には (12) に見られた接続助詞化が進んでいない例で、2 例目とは性質を異にする。また、当該箇所は (12b) に示した『徒然草』(一一二段) の引用である。

¹⁷ 春日 (1942)、明治書院『日本文法大辞典』「いへども」の項 (西田直敏執筆)、東京堂出版『訓点語辞典』「イヘドモ・イフトモ」の項 (斎藤文俊執筆) 等。

¹⁸ 田中雅和 (1992) に次のような例が挙げられる。

・太子誘ラヘ語テ宣フ「親ト云ヒ子ト云ヘトモ遂ニハ皆長ク別レナムトス。…」

(三宝絵詞下 田中雅和 1992 : 46)

- b. 「さて / \ 世間には、にた物が有とはいへども、今の者ほど、ぶあくににたものはなひ、
 (虎明本狂言集 武悪)
- c. 都とはいへ共、某がひげほど見事なは有まひと有て、すなはちさいのほこのやくを仰付られたが、なんぼうかたじけなひ事ではなひか
 (虎明本狂言集 髭櫓)
- d. 相撲は、四十八手とは言へ共、砕けば、百様にも、二百様にも取る、
 (天理本狂言六義 鼻取相撲)

この状況は近世以降も同様であり¹⁹、「とはいえども」は、少なくとも「とはいえ」が発生するまでは接続詞的用法を持たなかったということになる。

5 「さいえ」について

最後に、「とはいえ」の成立に関連するものとして「さいえ」を見る。「さいえ」は前文脈を受けて「そうは言っても」と転換する、接続詞相当の連語である。「とはいえ」成立と同時期の近世前期から例が見られる。

- (19) a. 怖しや。立帰て明日は発心するぞふつ / \ と俺が事をば思やんなこちには忘れ果てたるぞや。さい言へ今宵来たと云事ばかりは知らせたい 納に顔がにし / \ と。見たい事やと…
 (八百屋お七 [1714 演])
- b. 手本紙ささげて、はばかりながら、文章をこのまんと申せば、指南坊、おどろきて、さいいへ、いかが書へしと、あれば、今更馴しく御入候へ共、
 (好色一代男巻一 [1682 刊])
- c. 男の子はうつくしく、女の子は大かた顔ふくれて…一生親の気づくしになる事なり。さいいへ昔玄宗皇帝の時代には、万民女子をもふくることをたつとみ、
 (世間娘気質巻三 [1717 刊])

類似する形式として、中古和文に広く「さいえど」が見られる。一見「さいえ」に連続するようにも思えるが、中世後期には例が見られない²⁰ため、「さいえ」は「さいえども」に連続するものとして扱うことはできない。

- (20) a. 「そのをりの歌は、これこそありけれ。さい言へど、それが子なれば」など言はればこそ、かひある心地もしはべらめ。
 (枕草子九五段)
- b. 大殿には、御物の怪めきていたうわづらひたまへば、誰も誰も思し嘆くに、御

¹⁹ 発話から地の文への転換点に「とはいえども」が見られる場合はあるが、「言葉を口に出す」か、もしくは「世間の人が口にする」の意味を残すものに限られる。

²⁰ 「さうはいえども」のみ 1 例、『天理本狂言六義』に見られる。なお、より一般的な「さいえども」も同時に衰退する。「ども」の衰退 (小林 1996) と並行するものと思われる。

歩きなど便なきころなれば、二条院にも時々ぞ渡りたまふ。さはいへど、やむごとなき方はことに思ひきこえたまへる人の、めづらしきことさへ添ひたまへる御悩みなれば、…
(源氏物語 葵)

6 「とはいえ」の成立について

第5節までの調査結果を箇条書きにまとめ、用例の分布を次頁の表に示す。

- ・「とはいえ」は近世前期から見られ、接続詞的用法の出現が接続助詞的用法に先行する。接続助詞的用法は近世後期に数例見られ、明治期に入ると急増する。
- ・「といえ」が見られるのは「とはいえ」よりも遅い近代以降である。
- ・「ともいえ」が中世前期以降に見られる。これは、命令形によって逆接仮定条件を現せたことを成立の前提としており、「ともいえども」の「ども」が脱落して成立したものではない。
- ・「とはいえども」は中世以降に広く見られるが、文中で接続助詞的に働くもののみが見られ、近世に至っても接続詞的用法の例は現れない。
- ・「さはいえ」は近世前期から見られる。「さはいえども」は中古に用例が多く見られるものの、中世後期になると用例が見られなくなり、「さはいえ」とは断絶がある。

以上より、「とはいえ」とその類似形式の成立事情について、次のように考えたい。

まず、「とはいえども」と「とはいえ」は派生関係にはない。「といえども」という、より一般的な形式があったにもかかわらず、「といえ」が近世までに見られないことに加え、接続詞的な用法を持たない「とはいえども」から、一足飛びに接続詞的な「とはいえ」が派生するとは考えづらいからである²¹。また、「さはいえ」は「さはいえども」の「ども」が脱落した形とも考えられるが、中世後期に既に「さはいえども」が見られないことから、これも「ども」の脱落以外の要因によって成立したものとする。

第3節にて、(13) (15)に「ともいえ」の例、(16b-d)に「何ともあれ」の例を挙げた。これらの「と」は前接名詞を受ける格助詞であるが、「ともあれ」という形式は、中古以降に見られる「ともあれかくもあれ」の類に端を発している。「ともあれ」の「と」は格助詞ではなく指示副詞であり、先行文脈を照応することから、接続語との親和性が高い²²。実際、「ともあれかくもあれ」の類は接続詞の例が先行してに現れており、「…はともあれ」は後発的である。

(21) a. たけとり、答へていはく、「とまれかくまれ、まづ請じ入れたてまつらむ。

²¹ また、逆接であることを明示するための「ども」を脱落させる方向に変化が進むことは考えづらい。「さはいえども」についても同様。

²² 岡崎(2011)の「カクテ」「サテ」の事例に類似する。

(竹取物語)

b. 「もし、さらずは、先帝の皇女たちがならむ」と疑ふ。ともあれ、かくもあれ、たゞいとあやしきを、「いる日を見るやうにてのみやは、おはしますべき。

(蜻蛉日記 中)

表 各時代における用例の分布²³

		とは		とはいえ		さはいえ
		いえども	ともいえ	接続詞	接続助詞	
中世	説話	2				
	軍記	8	9			
	法語	1				
	抄物	8	4			
	キリシタン		1			
	狂言	6	3			
近世 前期	狂言	2				
	噺本	11	1			
	浮世草子	9				2
	歌舞伎					
	世話浄瑠璃			5		1
	時代浄瑠璃	1	1	1		
近世 後期	噺本	2				1
	洒落本	3		1		
	談義本	1				1
	滑稽本	2				1
	人情本	8		7	1	3
	歌舞伎	1		7		2
	読本	8	3	4	1	
明治期	小説			1	5	1
	雑誌	12		3	138	30
大正期	小説	6		31	42	
	雑誌			4	8	3

²³ 「とはいえども」「ともいえ」には接続助詞、「さはいえ」には接続詞の例のみが見られる。近世以前における接続詞・接続助詞の判断は、意味の句切れの有無、「いかな」「たとえ」等の語句との呼応の有無、「と」の前接語の品詞を基準とした。稿末に記す通り、近世後期上方語資料も調査したが、上方・江戸間に特に差異が認められなかったため、表内には区別を設けなかった。

「さ」についても同様に「さもあれ」がある。これは「ともあれ」よりも成立が遅れるが、先行文脈を照応する「さ」を伴うことから、やはり接続詞的用法が先行する²⁴。

(22) a. それに何となく鬼どもがうち揚げたる拍子のよげに聞えければ、「さもあれ、ただ走り出でて舞ひてん、死なばさてありなん」と思ひとりて、

(宇治拾遺物語卷一・三)

b. 「仏はさもあれ、身共はみ付たがさいはひじや、こちへおこせひ

(虎明本狂言集 牛博勞)

さらに、「さ」に関しては中古以降、係助詞「も」ではなく「は」を伴う「さはれ」²⁵が用いられていたことも注目される。

(23) a. えさらず思ふべき産屋のこともあるを、これ過ごすべしと思ひて、たたむ月をぞ待つ。さはれ、よろづにこの世のことはあはなく思ふを、去年の春、吳竹植ゑむとて乞ひしを、このごろ「奉らむ」と言へば、

(蜻蛉日記中)

b. 「あはれ、なんでふ雀飼はる」とて憎み笑へども、「さはれ、いとほしければ」

とて飼ふ程に、飛ぶ程になりけり。

(宇治拾遺物語卷三・一六)

これら「ともあれかくもあれ」類や「さもあれ」「さはれ」のような、放任を表す動詞命令形に由来する転換の接続詞が既に存在したこと、逆接仮定条件を表す際に「あり」以外の用言の命令形を取ることができた（本稿第3節）ことを背景として、これが「言う」にも適用されたことによって「とはいえ」や「さはいえ」が成立したと考えたい。

「とはいえ」に接続詞的用法の例が先行することについても、この成立過程を想定することによって解決できる。副詞「と」を含む「ともあれかくもあれ」類が接続詞的用法を既に持っていたからこそ、「と」と形式を同一にする格助詞「と」による条件表現形式が、接続詞的用法から発生することが許容されたのである。

動詞「言う」が採用された理由としては、本義的な意味が希薄化した補助用言的な「言う」が特定の動作を示さないために、同じく実質的な意味が希薄な「あり」と交換しやすかったことや、逆接的な内容を述べるための前文脈の参照を行うことと、「という」の引用の機能との間に高い親和性があったということが考えられる。

²⁴ 『名語記』に以下の記述がある。当時、「ともあれ」「さもあれ」が共に用いられ、類似する形式と見做されていたことの傍証となろう。

・サマレ トマレナトイヘル マレ如何 ソレハサモアレ トモアレ ミ文字ノ中ノモア反リテ マ也 レニ合テマレ也 (名語記卷五)

²⁵ 「なるようになれ」を意味する「さはれ」（さはあれ）が逆接条件を表す用法を獲得したと見られ、これもやはり命令形に由来する。

・つごもりより、なにごちにかあらむ、そこはかとなく、いと苦しけれど、さはれとのみ思ふ。

(蜻蛉日記 中)

7 おわりに

以上、本稿では、「とはいえ」とその類似形式の例を検討しながら、「とはいえ」が「とはいえども」の「ども」の脱落ではなく、用言命令形を素材として「ともあれ」等と同じ原理で生産されたものであるということを示した。

今回は形式面の問題点に焦点を当てたが、接続助詞的な「とはいえ」には、藤田(1998)・高橋(2016)に指摘されるように、前件を「といっても」に置き換えられない、前件が後件の事情・実情・背景を説明する用法がある。

(24) 喜助は、知らなかった【**とはいえ**／*といっても】、罪を犯した。(藤田 1998 : 19)

特に(7b)のような例を見る限りでは前件と後件が対立的であるものを起点としたように見える。用法派生や前接形式の拡張²⁶、意味が類似する「とはいっても」等の「言う」を用いた複合形式²⁷との比較検討といった観点からの検討も必要であろう。今後の課題としたい。

調査資料 表の集計に用いた資料、本稿で引用した資料のみ記載する。

中古和文

竹取物語・蜻蛉日記・三卷本枕草子・源氏物語：国立国語研究所(2016)『日本語歴史コーパス 平安時代編』(新全集を底本とする)

中世前・後期

名語記(1275)：『名語記』勉誠社／徒然草(1330頃)：旧大系

[説話集] 今昔物語集(12C初)・梵舜本沙石集(1279)：旧大系／宇治拾遺物語(1242-1252)：国立国語研究所(2016)『日本語歴史コーパス 鎌倉時代編 説話・随筆』(新全集を底本とする)／米沢本沙石集：新全集

[法語] 正法眼蔵随聞記(1235-38頃)：旧大系／解脱門義聴集記(1236-1247)：納富常天「明恵述・高信編『解脱門義聴集記』『金沢文庫研究紀要』4

[軍記物語] 覚一本平家物語(1371写)、保元物語(1219-22頃)、平治物語(13C)、曾我物語(14C)、義経記(室町頃)：旧大系／斯道文庫本平家物語：『百二十句本平家物語』汲古書院／源平盛衰記：『源平盛衰記』国民文庫、荒山慶一氏作成テキストデータを使用／屋代本平家物語：『屋代本・高野本対照平家物語』新典社

²⁶ 例えば、次のように「から」に接続する例は、近代にはほとんど見られない。

・いくら先代の女神を妻に迎えた**からとはいえ**、彼らをやすやすと引き入れてしまう彼の力に、シャイハンは羨望と恐怖を覚えたものだった。(PB29_00467)

・しかし一区画が九百万円から一千万円もする価格を、場所がいい**からとはいえ**「安いでしょ」などと言わないで欲しい。(LBe3_00095)

²⁷ その全体像は砂川(2006)に詳しい。

[抄物] 史記抄 (1480) : 『史記桃源抄の研究』 日本学術振興会, 住谷芳幸氏による京大本史記抄テキスト (<http://www.gijodai.ac.jp/user/sumiya/kaken.htm>) を補助的に用いた。／毛詩抄 (1488-1490) : 『毛詩抄 詩経』 岩波書店

[キリシタン資料] 天草版平家物語 (1592) : 『天草版平家物語語彙用例総索引』 勉誠出版

[狂言台本] 虎明本 (1642 写) : 国立国語研究所 (2016) 『日本語歴史コーパス 室町時代編 狂言』 (『大蔵虎明能狂言集翻刻註解』 清文堂を底本とする) / 天理本 (寛永写) : 『狂言六義全注』 勉誠社

近世前期

[狂言台本] 狂言記 (1660) ・狂言記外五十番 (1700) ・続狂言記 (1700) ・狂言記拾遺 (1730) : 『狂言記の研究』 『狂言記外五十番の研究』 『続狂言記の研究』 『狂言記拾遺の研究』 勉誠社

[喃本] 東国板含む喃本 71 作品 (1613-1770) : 『喃本大系』 東京堂 (用例検索に国文学研究資料館『大系本文データベース』を使用)

[浮世草子] 西鶴浮世草子 (1682-1698) : 『新編西鶴全集』 勉誠出版 / 好色万金丹 (1694) ・新色五巻書 (1698) ・傾城禁短気 (1711) : 旧大系 / けいせい色三味線 (1701) ・けいせい伝授紙子 (1711) ・世間娘気質 (1717) : 新大系 / 好色敗毒歌 (1703) ・野白内証鑑 (1710) ・浮世親仁形気 (1720) : 新全集

[浄瑠璃] 近松世話浄瑠璃 24 作品 (1703-1722) ・双蝶蝶曲輪日記 (1749) : 新全集 / 近松時代浄瑠璃 6 作品 (1685-1719) ・時代浄瑠璃 6 作品 (1719-1749) ・八百屋お七 (1714) ・夏祭浪花鑑 (1745) : 旧大系

近世後期上方

[喃本] 上方板喃本 30 作品 (1773-1852) : 『喃本大系』

[洒落本] 上方板洒落本 36 作品 (1756-1853) : 『洒落本大成』 中央公論社

[浄瑠璃] 時代浄瑠璃 7 作品 (1751-1799) ・世話浄瑠璃 2 作品 (1772-1780) : 旧大系

[歌舞伎資料] 幼稚子敵討 (1753) ・韓人漢文手管始 (1789) : 旧大系

近世後期江戸

[喃本] 江戸板喃本 228 作品 (1764-1885) : 『喃本大系』

[洒落本] 江戸板洒落本 30 作品 (1769-1798) : 『洒落本大成』 / 江戸板洒落本 8 作品 (1770-1798) : 旧大系 / 江戸板洒落本 12 作品 (1770-1817) : 依田恵美編「忍頂寺文庫洒落本データベース」

[談義本・滑稽本] 談義本 5 作品 (1727-1785) : 新大系 / 当世阿多福仮面 (1780) : 『安永九年 当世阿多福仮面 本文と総索引』 港の人 / 当世杜選商 (1778) : 『叢書江戸文庫 19 滑稽本集』 国書刊行会 / 東海道中膝栗毛 (1802-1814) ・浮世風呂 (1809-1813) : 旧大系

[歌舞伎資料] 名歌徳三舂玉垣 (1801) ・お染久松色説販 (1813) ・小袖曾我薊色縫 (1859) : 旧大系

[人情本] 仮名文章娘節用 (1831-1834) : 鶴見人情本読書会 (1998-2000) 「翻刻『仮名文章娘節用』 『鶴見日本文学』 2-4 / 春色梅児誉美 (1832-1833) ・春色辰巳園 (1833-1835) : 旧大系 / 恋の若竹 (1833-1839) ・春色江戸紫 (1864-1868) ・花暦封じ文 (1866) : 全文検索システム『ひまわり用「人情本」パッケージ』 (岡部嘉幸氏作成, 底本は人情本刊行会) / 春告鳥 (1836) : 新全集 / 比翼連

理花酒志満台 (1836-1839) : 国立国語研究所 (2015) 『ひまわり版「人情本コーパス」(日本語歴史コーパス江戸時代編)』／春色恋廻染分解 (1860-1865) 『春色恋廻染分解 翻刻と総索引』おうふう

[読本] 椿説弓張月 (1807-1811)・雨月物語 (1776)・春雨物語 (1808 頃)・胆大小心録 (1808) : 旧大系／烟花清談 (1777)・敵討誰也行灯 (1806)・敵討枕石夜話 (1808)・巷談坡堤庵 (1808)・驚談伝奇桃下流水 (1810)・南総里見八犬伝 (1814) : 高木元氏作成テキストデータを使用

近代 国立国語研究所 (2016) 『日本語歴史コーパス 明治・大正編 雑誌』(短単位データ 1.0)／『CD-ROM 版明治の文豪』新潮社, 『CD-ROM 版大正の文豪』新潮社

参考文献

- 青木伶子 (1973) 「接続詞および接続詞の語彙一覧」鈴木一彦・林巨樹編『品詞別日本文法講座 6 接続詞・感動詞』明治書院, pp.210-253
- 石田春昭 (1939) 「コソケレ形式の本義 (上) (下)」『国語と国文学』16・2・3
- 上野左絵 (2016) 「近松瑠璃本のコーパス化 —「語り」のテキストをどう扱うか—」『じんもんこん 2016 論文集』, pp.25-30
- 大野晋 (1993) 『係り結びの研究』岩波書店
- 岡崎友子 (2011) 「指示詞系接続語の歴史的变化 —中古の「カクテ・サテ」を中心に—」青木博史編『日本語文法の歴史と変化』くろしお出版, pp.67-87
- 春日政治 (1942) 『西大寺本金光明最勝王經古点の国語学的研究』岩波書店
- 北崎勇帆 (2016a) 「現代語体系を中心とする活用語命令形の用法の再整理」『日本語学論集』12, pp.167-143
- (2016b) 「複合助詞「であれ」「にせよ」「にしる」の変遷」『日本語の研究』12・4, pp.1-17
- 小林賢次 (1996) 『日本語条件表現史の研究』ひつじ書房
- (2005) 「条件表現史にみる文法化の過程」『日本語の研究』1・3, pp.182-171
- 小柳智一 (2016) 「文法変化の方向と統語的条件」『日本語史叙述の方法』ひつじ書房, pp.55-73
- 砂川有里子 (2006) 「「言う」を用いた複合辞 —文法化の重層性に注目して—」藤田保幸・山崎誠編『複合辞研究の現在』和泉書院, pp.23-40
- 高橋美奈子 (2016) 「「トハイエ」を含む文の分析」『四天王寺大学紀要』62, pp.61-79
- 田中章夫 (1984) 「接続詞の諸問題」鈴木一彦・林巨樹編『研究資料日本文法 第4巻 修飾句・独立句編 副詞・連体詞・接続詞・感動詞』明治書院, pp.81-123
- 田中雅和 (1992) 「条件句構成の「雖」「トイヘドモ」「トイフトモ」について」『鎌倉時代語研究』15, pp.32-77
- 築島裕 (1963) 『平安時代の漢文訓読語につきての研究』東京大学出版会
- 中村幸弘 (1993) 「放任表現考」『日本文学の伝統 (国学院短期大学国文学会創設十周年記念論文集)』(中村幸弘 2005 『補助用言に関する研究』右文書院所収)
- (2006) 「近代評論文の放任表現」『国学院大学紀要』44, pp.159-188

藤田保幸(1998)「複合助辞「トイッテモ」「トイッテ」「トハイエ」について」『滋賀大國文』36, pp.12-25

山口堯二(1996)『日本語接続法史論』和泉書院

湯澤幸吉郎(1929)『室町時代言語の研究』大岡山書店

—————(1954)『増訂江戸言葉の研究』明治書院

付記 本稿は、科学研究費補助金(特別研究員奨励費 課題番号 16J00119)による成果の一部である。

(きたざき ゆうほ 大学院人文社会系研究科 博士課程1年)